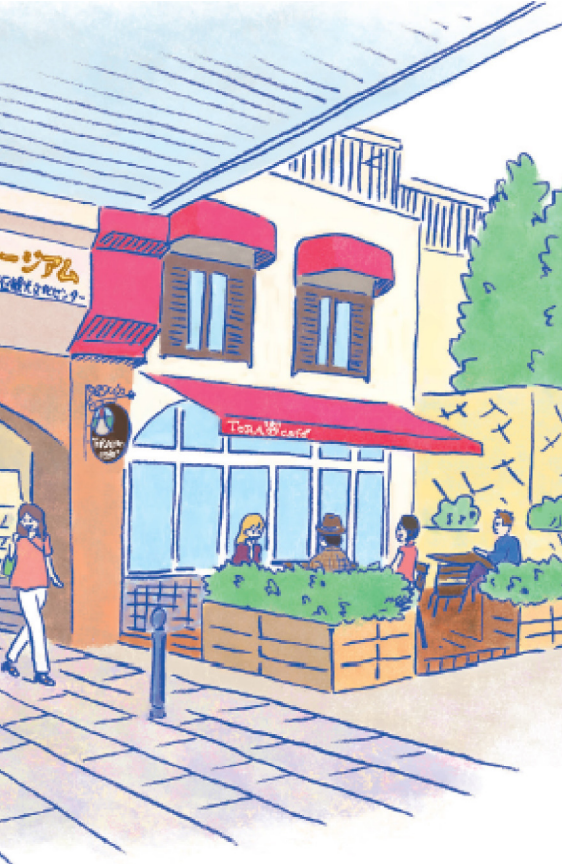




葛飾柴又 日本人の心のふるさと

山田洋次監督とスタッフは、当時、物語に相応しい場所を求めて、東京近郊のあらゆる候補地に足を運びました、イメージに合う場所がなかなか見つからず、諦めかけたときにたどり着いたのが、豊かな自然とそこに住む人々の温かい暮らしが息づいているまち、葛飾柴又だったのです。以来、映画ではシリーズ全ての作品で、撮影が行われています。

その葛飾柴又が平成30年2月13日に、都内で初めて国の重要文化的景観に選定されました。「葛飾柴又の文化的景観」は、地域の人々の生活、歴史、風土などによって形成されたものであり、伝統的な情緒や雰囲気を継承する日本を代表する景観地のひとつとして評価されたのです。

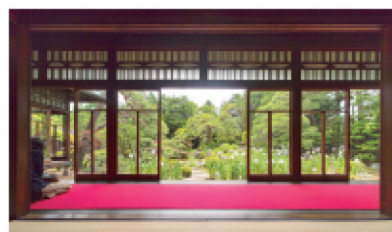
葛飾柴又 温かい心が通じ合うまち

東京の北東部、江戸川のほとりに位置する葛飾柴又は、水と緑と下町の風情あふれるまち並みが調和した佇まいがあります。その核となるのが柴又帝釈天と参道です。柴又帝釈天の正式名称は経柴山題経寺といい、厄除け、延寿、商売繁盛等に霊験あらたかとのこと。

帝釈天の先にあるのが、大正末期から昭和の初期にかけて増改築された近代和風建築の「山本亭」。書院造りの和室とモダンな洋間が調和した美しい邸宅です。緑あふれる典型的な書院庭園が訪れる人の目を楽ませています。

裏手の江戸川堤防を登り切ると出迎えてくれるのが川面を吹き抜けるさわやかな風。このあたりは、葛飾区が「柴又公園」として整備したエリアです。河川敷で野球に興じる子供たちの歓声の先に見えるのが「矢切の渡し」。伊藤左千夫の名作『野菊の墓』の一場面、二度と逢うことのない恋人たちが別れていった哀しみの舞台としても知られています。遥か対岸に広がる松戸市や市川市の丘陵地帯の眺望を楽しみながら流れをさかのぼれば、都内で唯一水郷の風情を味わえる「水元公園」があります。

そして知る人ぞ知る「柴又七福神」も見逃せません。7ヶ所のお寺を徒歩1時間足らずで一気に巡ることができます。



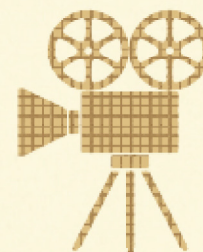
山本亭



柴又帝釈天題経寺へ
向かう帝釈天参道

葛飾柴又 寅さん記念館

山田洋次 ミュージアム



TORAnokabe cafe



「男はつらいよ」とは

「男はつらいよ」の始まりはテレビドラマでした。少年時代に憧れたテキ屋の思い出話を生き生きと語る渥美清の姿に魅了された山田監督が、イメージを膨らませて、旅暮らしのフーテンの寅、いつもその兄を案じている妹さくら、参道で団子屋を営むおいちゃんおばちゃん、近所の人々が織りなす下町情緒あふれる物語を紡ぎだしました。

ドラマが「フーテンの寅がハブに噛まれて死んでしまう」という最終回を迎えると、テレビ局に抗議が殺到。感銘を受けた山田監督が映画化を企画し、翌年1969年8月に映画『男はつらいよ』が公開されました。そして、1997年までに特別篇を含む49作品が制作され、国民的人気シリーズとして、今でも愛され続けています。